

音を刻む・思いを刻む

佐藤寛子

一月。年長組の三学期が始まった。四月からの小学校の生活も少しずつ見えてきて、ドキドキしながらも期待している子どもたちの様子が伝わってくる。

幼稚園での残りの二か月半、子どもたちと一緒にどのような生活をつくっていくか。幼児期の大切な時間、彼らに何を残すことができるのだろうか。

冬休みを終え、元気に登園してきた子どもたちは、そんな私の思いを知ってか知らずにか、変わらずにいまを生きるエネルギーに満ちていた。

音を探す

正月気分も少しずつ薄らいできた一月末のことである。A子は、カセットから流れるお気に入りの曲に合わせて、リズムを叩き始めた。両手に持つのは葉簞。A子の周りには、ステンレスのボウル、フライパン、洗面器などが程よい間隔で並べられている。

A子が保育室にあるものを叩いては、音を確認する

ような遊びを始めたのは、二学期の運動会が終わったところからだった。

「せんせい、棒の先にさ、丸いのついてるのがあるでしょ。木琴とか叩くやつ。あれ、作りたいんだけど手伝ってくれないかな？」

と、ある日、A子が言ってきた。

やりたいことがあると黙って自分で行い、教師に手伝ってほしいと伝えてくることなどほとんどなかったA子が、突然言い出したことに驚いた。何がしたいのか興味があつたが、とりあえず何も聞かずに、一緒に作り始めた。

試行錯誤の末、太めの竹ひごの先にちり紙を硬く丸めたものをつけ、ビニールテープで巻いて固定することにした。園にある本物の木琴のバチの先は、黒や茶色など渋い色味のものが多かった。A子の好きなピンクのビニールテープを使ったことで、かわいらしい雰囲気のパチに仕上がった。A子は気に入った様子で、両手に持つとうれしそうに跳びはねた。

その後、A子は、積み木や空き箱、空き缶などを、その手作りのバチで叩いては、音を確かめ、気に入った音がすると、自分の引き出しにしまつて帰った。

翌日登園すると、引き出しから、集めた物を取り出し、自分の周りに並べては、かなり長い時間リズムよく叩いて過ごす。その姿はまるで本物のドラマーのようだった。

A子の熱中する様子に気づいたB子が、
「せんせい、私もAちゃんみたいなバチ作りたい！」
と加わった。A子と私とで手伝いながら、色違いのバチが完成する。

それから、A子とB子二人でバチを持ち、空き箱や空き缶、積み木以外にも、壁や扉、床などを叩き、気に入った音やリズムを見つけ、楽しむようになっていった。二人の様子を見て、ステレンスのボウルや小さなフライパンなど、叩くときれいな音がするものを幾つか用意した。A子は、バチで叩いて音を確かめ、気に入ると、自分のドラムセットに加えた。

カセットから流れるデイズニーのメドレーや、少し前にCMで流れていた「オペラディ・オペラダ」の曲がA子のお気に入りだった。曲に合わせて叩くようになると、周囲の子どもたちも一緒に楽しむようになった。観客席を作ったり、訪れた小さい組のお客さんに、ドラムの音楽と一緒にケーキを振る舞う喫茶店もできたりと、A子のドラムを中心に、遊びの輪が広がっていった。

冬休みが明けた三学期、私は、A子のこの遊びが続いていくことを願った。そんな私の思いを察して、養護教諭はいらなくなったほうろうの洗面器や足ペダルでふたの開け閉めができるゴミ箱など、保健室で不用になったものを分けてくれた。副園長も、いまは使わないからと、自宅の練習用のドラムセットを園に持ってきてくれた。

もちろん、休みをはさんで新たな気持ちで登園してくるかもしれないA子の心もちを大事にしようと思っ

ていたが、新しい魅力的なものが刺激になって、二期の遊びからさらにA子の世界が広がっていくとよいと考えていた。A子の音探し、音作りにもう少しかわりたい。この遊びを通して、A子が表現しているメッセージは何なのかを受け止めたいと考えた。

音を気にする

昨年度の四月に入園してきたA子は、両親の仕事の関係で、送り迎えは祖母やシッターさんであることが多かった。入園当初から、かたくななまでに自分のことは自分でしようという気持ちの強い子で、身じたくなどを私が手伝おうとしても、「一人でできるから！」と時間がかかっても自分でやろうとした。「一人でできるんだ」と思うことで、自分自身を必死に支えているようだった。

四歳児の四月は、進級児でさえも、保育室が変わり、担任も替わり、てんやわんやである。進級児、新入児が混ざった33名のクラス。みんなが安心して落ち着

いて集うことができるまでには時間がかかった。

「せんせい、やってー」という声。もめ事が起こってドタバタしている物音。私もその渦中にいて、音には無感覚になっていた。そんな最中に、

「うるさーい」とA子が叫んだのだ。

どんな物音よりも大きな声に、クラスのほかの子どもたちも驚き、みんなA子を見た。A子は両手で両耳をふさぎ、

「うるさいから、静かにしてー」ともう一度叫んだ。

その後も、お弁当の時などに、みんなが伝えたいことがあって一斉に話したりすると、A子は決まって、「うるさーい！」と大声を出した。帰りの集まりにみんなを歌う時も同じだった。ハーモニ―とはほど遠い歌声であったことは事実だが……。

園の生活とA子の家庭の生活とは、おそらく雲泥の差だったのだろう。けれど、ほかの子どもたちの中にも同じような環境の人はたくさんいるはずだ。みんなが一斉に主張しているかのように言葉や物音を発する

中で、A子はいったい何を感じていたのだろうか。

クラスが落ち着き始めてくると同時にA子の「うるさーい！」もいつしか聞かれなくなり、私はあのころのことをすっかり忘れていた。

音を刻む

手作りのバチは冬休みに家に持ち帰ったまま持つてくることはなかったが、たまたま見つけた菜箸で、A子は三学期に入ってもまた、音を鳴らし始めた。A子に相談してから出そうと決めていた足ペダルつきのゴミ箱、練習用のドラムセットを見て、A子は、

「すごい！ いいねー」と目を輝かせた。

「つるすと音が変わるのよ」とフライパンや、ボウルにひもを付けてつるしてみることを私から提案。さらに雰囲気が出るように、幼稚園にある古い人形劇の舞台を利用した。周りの子どもたちも興味をもってかわり、置き場所やつるす位置、ひもの長さなどを、ワ

イワイ言いながらみんなで考えた。

ピアノやカセットテープの音楽に合わせて、まずは、A子がバチを振るう。拍をとるように叩いたり、強弱をつけてみたり、曲に合わせて、気持ちをこめて演奏していることが伝わってくる。

ほかの子どもたちもA子の気持ちを受けて、曲に合わせてリズムを奏で始めた。

A子は、やりたいと言って加わってきた友達には快く場を譲ったが、興味はあるものの、半分冷やかしのような感じで乱暴に音を鳴らす人には、容赦せず、強い口調で追いつ返した。

自分の音を見つけ、刻むことで、自分の気持ち、自分の存在をみんなに伝えている。そんな感じがA子の表現から伝わってきた。

一月の末から二月にかけて、保育室にできた小さなライブハウスには、連日、小さい組のお客さんが足を運んでくれた。



▲小さなライブハウス

暗くしたほうが雰囲気が出るからと、誰かが気を利用して電気を消したことがきっかけで、スポットライトを使ったり、OHPで天井に絵を写したりと、粋な

演出が加わった。A子たちのバンド演奏をバックに、独唱する人、客引きや司会をする人も現れ、子どもたち一人ひとりの思いが重なった。時には、かなり騒々しい雰囲気になったのだが、そんな中、A子が気持ちよさそうに音を刻む姿が印象的だった。

思いを刻む

A子の音探しと一緒にかわりながら、年中組の時の彼女の姿がふと思い出された。周りの子どもたちの思いであふれた音の塊の中で、「一人でできる」と頑張っていたA子の心は、押しつぶされそうだったのかもしれない。「うるさーい！」と叫ぶことで、かき消されそうな自分の存在を、懸命に伝えようとしていたのか、もしれない。コツコツと自分の音を探し、規則正しく、時には力強くリズムを刻むことは、自分の存在を自分で確かめていく作業だったのだろう。そして、それは同時に、相手の音を、相手の声、思いとして受け止めていくうえでの大事な基盤になっていった。それぞれ

に主張し合った音同士はなかなか調和できないが、音同士が響き合い、重なり合った時は、美しいハーモニーを生み出す。「みんなで気持ちよく暮らすということは、そういうことなのだな」と、A子を通して改めて感じた。

幼児期は、子どもたち一人ひとりが自分の好きなことを見つけ、じっくり取り組むことができる時間を十分に保証したい。緩やかな時間の中で、子どもたちが自ら始めた遊びには、すべて意味があると思うからだ。そして、その遊びに保育者がいていねいに向き合うことは、一人ひとりの思いに寄り添い受け止めるだけにとどまらず、共に暮らす周りの子どもたちの思いと重なり、つながっていくことになるだろう。

子どもたちが遊びの中で自分の思いをしつかり刻むことができるよう、そして、周りの人と思いを重ねながら生きる豊かさを十分に味わうことができるよう、幼児期の大事な時間を私も共に過ごしていきたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)